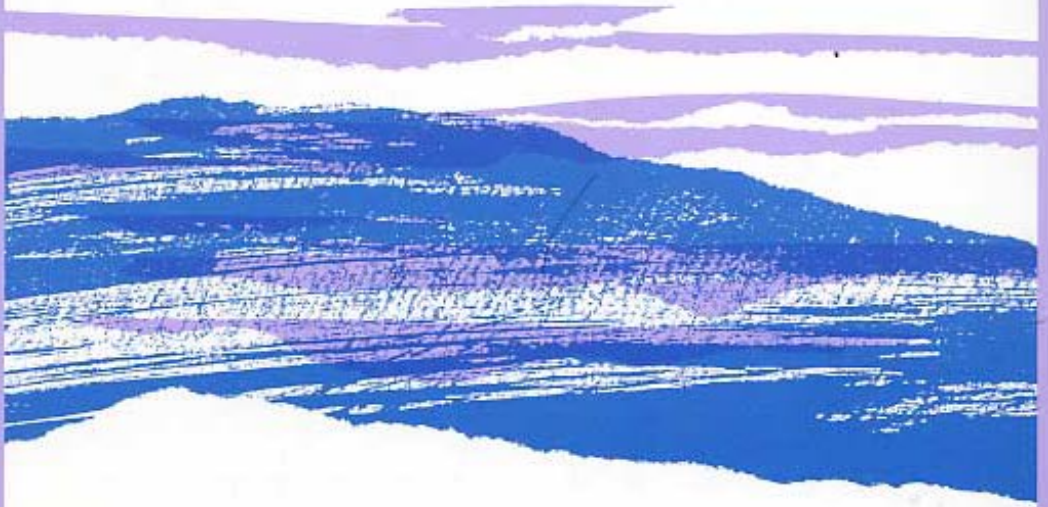


昭和46年2月1日第3巻第2号発行
平成16年12月1日発行(毎月1回1日発行)
俳句雑誌 沖 第15巻第12号

俳句雑誌「おき」

沖

12
月号



沖
発行所

国東の秋

林 翔

狐 & 狸

両子寺にて 三句

句 碑 高 し 句 業 も 高 し 秋 う ら ら

友 の 碑 へ 秋 水 音 を 絶 や さ ざ る

瀬 音 聴 く 楓 こ そ 先 づ 紅 葉 す れ

田染耶馬

天 そ そ る 岩 壁 に 今 秋 日 燦

「もしもし、あなたはどなたです」

「わたしはめくらの狐です」

「今ごろ何しに来たのです」

「お庭の鶏ちようだいな」

「めくらのことなら、あげましょう

三遍まわつてお辞儀しな」

「二へん、二へん、三へん」

ここでびよこんとお辞儀しながら
目隠しを取り、鬼ごっこに変わる。つ

かまった子が次のめくら狐になる。

私が子供の頃に友達とよくやった
遊びであるが、今思えば不具者への
いたわりも籠められていて、なかな
かいい遊びだと感じる。

影絵遊びにも狐の影絵があり、昔
は狐が身近な存在だったのだろうが
今では動物園へでも行かなければ狐
を見られなくなりました。

伝説では狐も狸も化けると言われ
「狐狸のしわざ」という成語もある
くらいだから共通点はあるのだが、
どちらかと言えば狐には陰湿な感じ

元宮摩崖仏

摩崖 仏の御目御鼻秋気満つ

富貴寺

磴百段登れば石落の花あかり

ペトロ岐部カスイ像

聖像に赤き実捧ぐピラカンサ

三浦梅園資料館 一句

人に偉人花咲く枇杷に大木も

倒伏の篁あはれ台風痕

四国見ゆと言ふといへども秋霞

があり狸にはちよつと愛嬌がある。「証城寺の狸囃子」という童謡も覚えているが、これは野口雨情作詩中山晋平作曲と、後に知った。狸は発情期に腹が膨れるので、余計愛嬌者になっているのだろう。

前述の通り狐は動物園へでも行かなければ見られないが、狸はまだあちこちに居るのではなからうか。現に、私の住む市川市大野町でも二年前、私の前までは狸公に会えたのである。茂みの中から顔を出して私を見詰めているのが、何とも言えず可愛かった。

林 翔



長身句碑

能村 研三

母校で語る

私が中学高校を過ごした市川学園は、先師登四郎や林翔先生が長く教鞭をとった学校であるが、俳句の話をしてほしいという講演の依頼があった。

長身の句碑に抱擁秋寂びぬ
行く秋やほとけの山の要句碑

石刻の矜羯羅童子秋惜しむ

国東の人杉に座す藁ぼつち

市川学園は先代の古賀米吉先生の時代から、「個性の尊重と自主自立」を教育方針に掲げ、自分で自分を教育する「第三教育」を推進しているユニークな学校である。私立学校なので、生徒は土曜日も学校に来ることになっているものの、普通の授業は行わず、正に第三教育を推進する場として「土曜ゼミ」「土曜講座」に自らの意思で参加できるようになっている。

今同私は、その「土曜講座」のプログラムの中で一時間半の講演を行うことになり、在校生、父兄、教職員、それに一般市民の方も加わったの講演会となったが、俳句の魅力、楽しさについて、市川学園にゆかりのあった、登四郎、翔、耕二の句を掲げて話をした。目の前で居眠りをする生徒がいる反面、私の話すことを熱心にメモする生徒もいるなど様々であったが、高校二年生の生

富貴寺

流麗な屋根の宝^{ほうぎよ}形紅葉降る

剥落の壁画に見惚れ秋の声

冷まじや苔を厚着の奪衣婆

深秋のあばらに粗衣の仁王像

久住山

山容に火の性ありし秋の暮

神域の白息そそぎ笛高音

徒の二人が講演が終わったあと私の所へ駆け寄って来て、俳句を教えてほしいと言ってくれたことほうれしかった。この頃から俳句を始めて大人になるまで続けば、この上ないことだが、この後の受験、大学、就職という社会のプロセスを経て行く中で、とても俳句を続けなさいとは言えず、講演では、高校時代に一度俳句を創っていれば、いつか落ち著いた時に俳句に親しむようになるからと、半ば中断することを前提として話した。駆け寄って来た生徒たちには、若いうちから創り続けられれば、若い時にしか詠めない俳句も詠めるからとアドバイスをしたが、果たして今から俳句を始めてそれを続けることが出来るかどうか気になるところだ。

今回、母校で話をする機会を与えられたことは、大変うれしいことであった。

能村研三



蒼茫集



夫の下駄

千田百里

紅葉づるを樹の溜息と思ひけり
秋うらら捨てかけし書に読み耽り
夫の下駄借りて出づるや小望月
虫すだく闇に濃淡ありにけり
水澄むや中洲に鷺の帆をたたみ
飛鳥野にあそぶ初焼く畦伝ひ

冬瓜汁

北川英子

てらてらと安房の潮照り早稲を刈る
せめてもと互みに称へ敬老日
冬瓜汁修羅場なかりしかに老境
神名備の走り根まぎれ蛇穴に
茸籠に鈴付け合ふもけもの道
秋麗の道なりに来てぽつくり寺

草は実

松本圭司

爽やかに少年席をゆづりけり
年取りてますます頑固卓は実に
許されぬ一事を胸に林檎割る
鶏頭の恥を忘れたやうな赤
秋扇あふげば秋の風生まる
松虫を聞きてより耳聴くをり

電飾

金子孝子

電飾のやうに実を付け林檎の木
霧の夜の地霊噴きあぐ浅間山
さきがけて櫛が色づくピカソ館
赤とんぼ翻りては色深む
降りて来し峯正面に走り蕎麦
木登りをせし榧の実も生るころぞ

潮鳴集

棹音 白井剛夫

日へ胸を大きく反らし稲架掛くる
瀬の石に触るる棹音水澄めり
秋卓図余白に風を聞くごとし
秋螢瀬音は闇を深くして
旅づかれ癒やす新酒の二々三口

林立 中高あきら

コスモスと少女等の脚林立す
稲刈るや空に漣あるごとし
掌中に珠あるごとく曼珠沙華
鶏頭の群るるは声の湧くやうに
吹かるるは紙片にも似て秋の蝶

現役 田辺博充

鯖雲に明日も来るぞと父祖の山
稲雀風のかたち群れ飛び



案山子まとふ昔日のわが一張羅
曼珠沙華まだ現役の足の過ぐ
半島は諸仏に委せ神の留守

泣き笑ひ 石渡芳枝

秋澄むや延命水を掌に掬ひ
老いてなほ背筋きりりと濃竜胆
鬱の字はルーペに書かせ燈火親し
沈き笑ひさせて夜長の受賞作
この辺り情死跡とやまんじゆさげ

波の秀 谷口みちる

帰省して幼なじみの闇に会ふ
干網になりきつてゐる秋あかね
波の秀の炎となりし秋入日
船笛の嫋々色なき風の中
どちらから言ひし夜寒や風つのる

沖作品



能村研三 選

かまつかに発起の色の潜みぬむ

水引やたれを待ちぬる女郎蜘蛛

火の鳥の火の穂とおもふ赤い羽根

星飛んで指人形の泣くかたち

穂芒の羽音を持たぬ翼かな

東京をはみ出して釣る鯨日和

烏瓜澄み行く空の忘れ物

月が手を伸ばしてきたる茸かな

流星や闇持ち上ぐる波頭

日翳りて海の退く花野かな

満月の引力に浮く遠嶺かな

露の玉こぼさじと葉のゆるぎ揺れ

秋徼雨けぶり音なき寺の町

ヘッドライト灯し夜霧の深さかな

耳打ちを胸に納めてより秋思

東京

工藤 進

千葉

林 昭太郎

市川市

栗原 公子

穴惑やり残すこと多かりき

贖罪の歴史を秘めて黒葡萄

肩を過ぐ風の軽さや涼新た

秋の風錦帯橋を丸く抜け

露むすぶ音か火星の水の音

登高の歩幅三十五を信ず

握手して体温知りぬ秋の暮

老優の訃あり夜霧の尾灯美し

松手人風神山へ帰りけり

秋風や川魚切に闘志研ぐ

百千の焰を立てて曼珠沙華

蓮の実の飛ばむと力溜めてをり

鯨釣の父子に早き日暮かな

長き夜の序章オペラの始まりぬ

曼珠沙華燃えて高麗郷高ぐもり

内山 照久

東京

坂 ようこ

千葉

佐々木よし子

満天に星座定まる野分あと
船霊に酒たてまつる良夜かな
鬱勃と黒富士ありぬ蕎麦の花
一服の鍬の柄にくる赤とんぼ
ボート百艘向きそれぞれに鯨日和
霧こめて滝のとどろき失せにけり
崩落の岩をつかむ根木の突降る
槍となり炎となりし野分雲
釣舟草するべあやふき登山口
星夜夜旅の足湯にたはむれて
金木犀空のほひのありにけり
里山へ列来ねをり蕎麦の花
花野風色ある夢の中にをり
蓮の実の飛んで性善信じたし
けふ大暑豚の乗りたる大秤
昼寝覚め少しずれたる裏の山
調律の一音とんで走り萩
かなかなやさびしからねども傘々
窓拭いて隣の庭柿かがやかす
この先の生死は知らず桐の化
点滴の落ちて揺らぐや梅雨の底
蹠より死にゆくものや夏の夜半
歯噛みして擱むベッドの手摺冷
大荷物残しゆく身や秋の虹

茨城

内山 花葉

今瀬 一博

新潟

長谷川 春

荒木伊左夫

来し方や酸っぱきものに梨の芯
太刀魚を釣り上げ海に刀傷
じやこ食べてやや秋寒の日と思ふ
安曇野の畦の極みに濃竜胆
爪剪つて濯ぐ嬰のもの小鳥来る
朝寒やピアノの上の庭鉢
荒れ畑の冬瓜いつくしむ夕日
曼珠沙華桜田門に火群立つ
鮭遡上待つ川の音水の色
一点のひろがり小鳥渡り来ぬ
人ごゑに応へ飛びつく草虱
小鳥来る切株はみな森の椅子

東京

齊藤 實

千葉

大沢美智子

北海道

梶川智恵子

新人賞予選句（十二月）

星飛んで指人形の泣くかたち
烏瓜澄み行く空の忘れ物
満月の引力に浮く遠嶺かな
露むすぶ音か火星の水の音
握手して体温知りぬ秋の暮
蓮の実の飛ばむと力溜めてをり
船霊に酒たてまつる良夜かな
霧こめて滝のとどろき失せにけり
蓮の実の飛んで性善信じたし
昼寝覚め少しずれたる裏の山

工藤 進

林 昭太郎

栗原 公子

内山 照久

坂 ようこ

佐々木よし子

深田 雅敏

内山 花葉

今瀬 一博

長谷川 春

沖作品 選後句評

*
能村研三

星飛んで指人形の泣くかたち 工藤 進

人間の心の中には誰もがメルヘンの心を持っている。この句も正にメルヘンそのものの句である。指人形は指の先に親しみのある動物や昔から伝わる子供心にもなつかしい童話の世界のキャラクターのものをつけて、指の動きだけで表情を作るものであるが、極めてシンプルなものでなくてはならない。しかしこの単純な構成でも想像力が豊かであれば、一つの指の動きだけで、楽しいことも時には悲しい表現も演出できる。まさに俳句と同じように省略された中から、想像力を膨らませていくものである。夏休みのある夜、子供たちに指人形などを演じるお楽しみ会があったのだろう。満天の夜空には星が輝き、時折流れ星が降るのを見えた。この句は二句一章の句であるが、季語を単に流れ星とせず、星自らが飛ぶという能動的な表現とし

たことが効果をあげている。

烏瓜 澄み行く空の忘れ物 林 昭太郎

すべてが枯れ尽した晩秋、真っ赤に熟れて垂れ下がっている烏瓜の姿は印象的であるが、この頃になると空気も澄んでその背景となる空の青さも一段と深くなる。今まで青々としていた野山も枯れて、烏瓜の存在は枯山の勲章のようなものだ。これを真つ青な空の忘れ物と見立てた詩情の豊かさに感心した。

満月の引力に浮く遠嶺かな 栗原 公子

月の干満が地球に様々影響を与えているのは周知のことであるが、秋の夜に満々とした大きな月が輝くさまを見ると単なる美しさを超えて誰もが不思議な力を感じ取る。遠き峰々を背景に煌々と輝く満月を見ると、その引力で山々が浮かび上がって見えた。「引力に浮く」という心象的な措辞がすばらしい。

露むすぶ音か火星の水の音 内山 照久

火星に探査機が行けるようになって、にわかに火星に水があるのではないかということが再燃している、果てしない宇宙の中にせめて地球と同じように水が存在する星があっても良いと思うのは人間の素直な心理なのかも知れない。作者は火星に水が存在するだけでなく、水の音までも感じとり、それを「露むすぶ音」と詩的なイメージに昇華させた。

。(以下略)